

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00293

研究課題名（和文）水上勉資料の調査による戦後文学の総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Postwar Literature Based on a Survey of Tsutomu Mizukami's Materials

研究代表者

大木 志門 (Ohki, Shimon)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：00726424

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では2004年に死去した作家・水上勉の旧宅に保管されていた資料を分類・整理し、その価値を明らかにした。本研究で調査の対象とする水上勉旧蔵資料は、量的に類例のない近現代作家の資料群であることはもちろん、質的な面からいってもその存在は重要なものである。この研究期間のうちにそれらのほとんどを分類・整理することができ、2200点にのぼるデータベースを作成した。またその研究成果の発表を行った。それらを分析することによって、水上勉個人の研究に大きな進歩をもたらしたことはもちろん、より広く日本の戦後文学や文化研究などに一定の意義をもたらしたものと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1948年に『フライパンの歌』でデビューして以来、2004年に死去するまで常に戦後文壇の中心にあり、また純文学から推理小説、伝記小説、紀行文、児童文学、演劇など様々なジャンルで活躍した水上勉の資料は、戦後文壇と出版文化の現場を映し出す第一級の資料である。それらを整理分類し、また調査解析を行うことによって、これまでほとんど研究されていないこの作家の研究に寄与するだけでなく、彼が活動した戦後文壇の編制と変容、あるいは水上勉を中心にして、その文壇のネットワークの広がりがある程度まで明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This study categorized and organized the materials stored at the former residence of writer Tsutomu Mizukami, who died in 2004, and clarified their value. The materials in the former collection of Tsutomu Mizukami, the subject of this research, are not only an unprecedented collection of materials on a modern and contemporary writer in terms of quantity, but also important from a qualitative point of view. During this research period, we were able to classify and organize most of them, creating a database of 2,200 items, and presented the results of our research.

By analyzing them, we believe that we have not only made great progress in the research of Tsutomu Mizukami himself, but have also brought a certain significance to the study of Japanese postwar literature and culture more broadly.

研究分野：日本文学

キーワード：戦後文学 自筆資料 高度経済成長期 出版文化 水上勉

1. 研究開始当初の背景

水上勉は戦前、日本農林新聞、学芸社、三笠書房などに勤務し、代用教員などを経て戦後『フライパンのうた』(1947)でデビューし一定の評価を得るが、その後しばらく雌伏の時代を過ごした。その後『霧と影』(1959)『海の牙』(1960)『飢餓海峡』(1963)などの社会派推理小説で再び知られるようになると、直木賞受賞作の『雁の寺』(1961)をはじめ『五番町夕霧楼』(1963)『越前竹人形』(1963)などの中間小説、『寺泊』(1977)などの私小説的純文学、『金閣炎上』(1979)などのノンフィクション、『一休』(1975)『沢庵』(1986)などの伝記的仏教文学、『ブンナよ、木からおりてこい』(1980)などの児童文学、『若狭』(2000)などの紀行文学と多ジャンルに渡って創作を行った。また直木賞と芥川賞の銓衡委員を長く務め、2004年に没するまで常に戦後文壇の第一線を歩んだ作家である。しかし、その存在は純文学中心の既存の「文学史」の中にほとんど位置づけられていなかった。

もちろん、そのような「文学史」の正典への捉え直しも進んでおり、大衆文学・歴史小説・探偵小説・サイエンスフィクション・少年少女文学など、これまでエンターテインメントとして周縁に位置づけられていたジャンル小説の歴史的な研究も進んでいる。しかし、その中でも水上勉は松本清張に並ぶ社会派推理小説の文脈にわずかに登場するのみである。しかし、戦後まもなく神田で虹書房を創業しつつ自らも創作活動を始め、社会派推理小説から「小説新潮」(1947年創刊)など黎明期の中間小説誌に積極的にかかわり、その後の中間小説誌・純文学誌で作品を書き分けながら高度経済成長期の文学需要の増加の中で流行作家となった水上であり、その存在は戦後文壇の編成を明らかにするためのミッシングリンクとなるのではないかと考えられた。

なお研究代表者は科研費研究「水上勉自筆資料の総合的調査による研究基盤形成」(2016年度～2018年度)の採択を受け、研究分担者の掛野剛史・高橋孝次とともに水上勉旧居に残る資料の調査を行ってきた。そこでは、まずは全貌の分からない膨大な資料群の全体像を把握し、それを整理・分類する道筋をつけることで作家の創作歴に沿った資料の位置づけを明らかにすることが第一の目的であった。水上勉の文学史的なイメージは、松本清張とともに社会派推理小説の流行を作った存在であり、その後は純文学とは一線を画した読者受けのする小説を多作した大衆的な作家というものである。しかし、この調査の過程で単純に線的に跡づける事のできない、水上の多様な創作活動の軌跡と、文学史の中で位置づけかねる多面的な作家像をあらためて意識せざるを得なかった。

前述のように、近年はこれまでの純文学偏重の文学史の見直しが進み、歴史小説・探偵小説・SFなどのジャンル小説を含む文学のあり方を考える傾向が高まっている。特に水上に先立ち、社会派推理小説の分野で一時代を築いた松本清張については、藤井淑禎『清張闘う作家「文学」を超えて』(ミネルヴァ書房、2007年)、綾目広治『松本清張 戦後社会・世界・天皇制』(御茶の水書房、2014年)などの研究書や『松本清張索引辞典』(近代文藝社、2015年)などの辞典が刊行され研究が進んでいる。水上勉は清張とともに1961年のいわゆる「純文学論争」の言及対象になった存在であり、この「純文学論争」と社会派推理小説との関係については吉野泰平「松本清張と「文学」をめぐる言説配置 「小説新潮」から「純文学論争」へ」(「昭和文学研究」2016年9月)などの研究で明らかになってきた。

また、戦後刊行されるようになった「小説新潮」などの中間小説雑誌の研究も進んでおり、たとえば研究分担者の高橋孝次も関わっている科研費研究「中間小説誌の研究 昭和期メディア編成史の構築に向けて」(2012年度～2014年度、代表・小嶋洋輔)「中間小説誌の研究 - 昭和期メディアの読者獲得戦略」(2018年度～2020年度、代表・牧野悠)などが継続的な研究を行ってきている。以上の状況から、水上勉を通して文壇や戦後の日本社会を考えてみることも、またその旧蔵資料を用いて作家を通したより広い同時代の諸文脈を考察することが可能ではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、純文学と大衆文学の間を越境的に活躍し、第二次大戦後の文壇で極めて重要な位置を占める作家・水上勉(1919-2004)の旧蔵資料を調査し、その全容を明らかにするとともに、それら資料をもとにした戦後文学の総合的な研究を行うものである。

現在、資料は長野県東御市の水上勉旧宅に保管されており、決定稿・未定稿など様々な作品の原稿をはじめとして、著名作家や編集者・文化人たちの書簡や、演劇関係資料・旧蔵書・遺品などが多数存在している。1で述べたように研究代表者は研究分担者2名とともに2016年度から2018年度まで科研費研究基盤C「水上勉自筆資料の総合的調査による研究基盤形成」を受け、資料調査を行った。本研究では残る資料の調査を完了するとともに、作家にゆかりのある関係者の聞き取り調査などを通して資料の重層的な価値づけを行い、最終的には本資料をもとにした戦後社会とそこにおける文学のありかたを考察することが目的である。

本研究で調査の対象とする水上勉旧蔵資料は、量的に類例のない近現代作家の資料群であることはもちろん、質的な面からいってもその存在は注目すべきものである。本研究においてそれ

らを整理し、分析することは、水上勉個人の研究に大きな進歩をもたらすであろうことはもちろん、近年活性化している戦後文学研究全体にとっても意義は大きいと考える。つねに戦後文壇の中心にあった水上勉の資料は、戦後文壇と出版文化の現場を映し出す一級資料であり、その調査解析のよって戦後文学の編制と変容、あるいはその文壇のネットワークの存在が明らかになることが期待される。

たとえば、戦後間もない1946年に水上が山岸一夫とともにはじめた虹書房時代、その後山岸とともに移った文潮社時代の原稿、宛書簡、出版関係の資料が多数存在している。師である宇野浩二はもちろん、太宰治、梅崎春生、川崎長太郎、田中英光、正宗白鳥ら、水上が編集者として関わった新旧世代の作家たちの書簡がほぼそのまま残されており、これらからは戦後すぐの混乱期における文芸出版のありかたや作家たちの動向が明らかになるはずである。これについては研究分担者の掛野剛史を中心に調査を始めており、その一端は既に「戦後出版界の一コマ 水上勉の虹書房・文潮社時代(日本出版学会 春季研究発表会、2018年5月12日)」で公開した。

また、1950年代の水上の原稿類と宛書簡類も残っており、いずれも整理が進行中であるが、今後の調査・分析が待たれる。この時代は中間小説雑誌が全盛期を迎え、ジャンルの混交の中で歴史小説や推理小説などが人気を呼んでいた。水上はそれらに積極的に関与し、社会派推理作家として多くの作品を発表し、この時代に始まったカッパノベルズ(1959年創刊)などのノベルズ判にも多くの作品を供給している。

これらの中間小説の興隆、中でも松本清張や水上の存在が平野謙らによる「純文学論争」(1961年～)を惹起したのであり、この時代の水上文学を研究することは、戦後文学における純文芸・中間小説・大衆文学の関係性を明らかにすることにつながるはずである。これについては、北九州市立松本清張記念館第13回松本清張研究奨励事業「松本清張と昭和30年代「中間小説誌」」(代表者、2011年度)などで中間小説誌の研究を継続してきた研究分担者の高橋孝次を中心に進めることとする。

また、水上が『雁の寺』(1961)以降、社会派推理作家から次第に純文学的傾向を強めてゆく1970年代から80年代の原稿類と宛書簡類が残っており、これも前者については整理が進行中であるが、後者についてはほとんど手付かずである。原稿については主要作品の多くが残っており、中でもこの時代の水上が力を入れていた『宇野浩二伝』(1971)『古河力作の生涯』(1973)『金閣炎上』(1979)などの評伝文学の原稿が創作資料とともに現存している。この時代は「大宅壮一ノンフィクション賞」(1970)が創設されるなど、ノンフィクションやルポルタージュの興隆期であり、これらの動向などとの関わりも含め、その一端は研究代表者の大木志門が「水上勉「金閣炎上」未定稿の紹介と翻刻」(「山梨大学教育学部紀要」2019.3 予定)として公開したが、研究代表者を中心に調査を進めることとする。

3. 研究の方法

本研究では、下記の2つの方法を主な柱として研究活動を行った。

A. 資料データベースの完成

前述の膨大な本資料群のうち、「水上勉自筆資料の総合的調査による研究基盤形成」(2016年度～2018年度)においては、主に1940年代から50年代までの宛書簡、同時代の出版関連資料、および1970年代までの原稿類およそ1600点の調査が完了した。今回の研究期間では、自筆物である1980年代以降の水上勉の原稿、ゲラ類、ノート・創作メモ類、および1960年代以降の宛書簡類を中心に分類・整理を行うこととする。この他に遺品や蔵書、演劇関連の資料が残るが、まずは残りおよそ2000点から3000点程度と想定される文学関連の自筆資料の調査を優先し、自筆資料のデータベースとして完成させることを目指す。

B. 資料の分析

上記のデータベースを活用し、資料を個別的または横断的に調査し、必要に応じて翻刻を行いそこから判明する事実をもとに考察を進める。たとえば原稿であれば、個別の作品について、未定稿と決定稿との差異から生成論的な視点から作家の創作法を検討する、宛書簡類であれば、その年代毎の差出人の傾向を分析し、作家の文壇における人的ネットワークを把握するとともに、戦後文壇の形成や広がりなどを検討し、その成果を公開してゆく。

これまで研究グループでは、旧蔵資料全体の中で優先して整理すべき自筆資料のうち、全体の3分の1程度の約1600点の目録化を2018年度末までに完了していた。この資料目録の公開については、科研費研究「薄田泣菫文庫の総合的調査および書誌の作成」(2010年度～2012年度、代表・片山宏行)や倉敷市編著『倉敷市蔵薄田泣菫宛書簡集』作家篇・詩人篇・文化人篇(八木書店古書出版部、2014年～2016年)で作家コレクションの整理と公開に関わってきた研究分担者の掛野剛史と、データベース化については高橋孝次「新発見資料「タルホと月」の意義『一千一秒物語』の生成」(「日本近代文学館年誌 資料探索」2013年3月)や小嶋洋輔・西田一豊・高橋孝次・牧野悠「小説朝日」 中間小説誌総目次」(「千葉大学人文社会科学」2013年9月)などで作家資料の意味づけや資料の目録化に関わってきた研究分担者の高橋孝次を中心に行った。

その整理した資料の調査結果として、これまで 大木志門、掛野剛史、高橋孝次「水上勉宛田中英光書簡18通 水上勉資料の中から」(「昭和文学研究」2017年9月)、大木志門「水上勉『金閣炎上』未定稿の紹介と翻刻」(「山梨大学教育学部紀要」2019年3月予定)などの研究論文や、大木志門「徳田秋聲と水上勉 二人の文学者資料のケースから」(2017年3月4日科

研費研究「折口信夫旧蔵資料の調査とその評価を通じた同時代文学の資料学的研究」、掛野剛史「戦後出版界の一コマ 水上勉の虹書房・新潮社時代(日本出版学会 春季研究発表会、2018年5月12日)などの研究発表を行った。は水上の戦後すぐの出版活動と文壇的ネットワークを明らかにする研究、は1970年代の水上文学を明らかにする原稿を用いた生成論的研究、は資料全体の位置づけを明らかにするものである。

同時にここまで主に整理してきた資料の存在を位置づけ、作家研究に結びつけるための聞き取り調査を開始しており、その成果を大木志門・掛野剛史・高橋孝次「虹書房・日本繊維経済研究所時代の水上勉 北野英子氏・奥田利勝氏に聞く」(「山梨大学国語・国文と国語教育」2018年2月)、掛野剛史・大木志門・高橋孝次「浦和時代の水上勉 内田潔氏に聞く」(「埼玉学園大学紀要 人間学部篇」2018年12月予定)として公開した。ともまだ決定版の年譜も存在しない水上の伝記的研究の空白期を明らかにするとともに、水上の戦後すぐの出版活動や文壇的ネットワークを明らかにする研究で、と関わるものである。なお、上記に連続する調査として、2018年8月21日には1970年代以降、水上と担当編集者として関わった小池三子男(元河出書房新社) 山口昭男(元岩波書店) 長谷川郁夫(元小沢書店) 大槻慎二(元福武書店、朝日新聞出版)各氏への聞き取り、9月28日には水上勉長女の路子氏への聞き取りを行った。

なお、上記の資料を用いた作家研究については、研究代表者の大木志門が「徳田秋聲『縮図』の 経済 未定稿から見える世界」(「昭和文学研究」2010年9月)などで草稿を用いた生成論的研究を行っており、文壇と出版文化の関係については研究分担者の掛野剛史が「戦時下出版メディアの諸相(1) 日本報道社と雑誌『征旗』」(「論樹」2014年12月)、「戦時下出版メディアの諸相(2) 山海堂と雑誌『報道』、大東研究所」(「埼玉学園大学紀要 人間学部篇」2015年12月)などで、戦後文壇の編成や人的ネットワークについては研究分担者の高橋孝次が「大衆雑誌懇話会賞から小説新潮賞へ 「中間小説」の三段階変容説」(「中間小説誌の研究 昭和期メディア編成史の構築に向けて」研究報告書 2015年2月)、「「中間小説」の真実なもの 「地方紙を買う女」と「野盗伝奇」」(「松本清張研究奨励事業研究報告書」2013年1月)などで継続的な研究を行ってきた。本研究においてもこれらの成果を活かして、それぞれの専門領域に則した研究を進めるとともに、総合的な作家像とそれをもとにした戦後文学像の提示を目指すものである。

4. 研究成果

2019年度は研究の初年度ということもあり、主に研究全体の基礎固めとなるような活動を中心に行った。当初の計画にしたがい、長野県東御市の水上勉旧居への調査を令和元年6月、7月、9月の3回にわたって実施した。同地に保管されている水上勉旧蔵資料のうち、資料の状態と重要度の観点から優先順位を付け、自筆原稿類と宛書簡類を優先して調査を行う全体方針を決定した。本年度はその手始めとして、昭和30年代半ばから50年代前半の資料を時代と分類ごとに整理し並べ直し、1点ごとに撮影と調書作成を行った。さらに現地で調査した結果を持ち帰り、データ入力して資料リスト作成を行った。この結果、本年度分で約550点、前科研費研究期間の調査分と合わせて約2,200点強の資料のデータ化が完了した。

以上により、これまで明らかでなかった水上勉の様々な文学的活動の詳細を知ることができる多くの資料が発見された。具体的には水上が「雁の寺」(1961年)で直木賞を受賞して以降、文壇で最も活躍した時代の原稿・書簡類である。特に未定稿、多くの反故原稿を含む作品の自筆原稿が多数見つかリ、次年度以降に発展的な調査および結果報告を行うための目途をつけることができた。なお本年度は水上勉の生誕100年の節目の年であり、令和元年6月にはこれまでの調査の成果発表として研究グループ3名の編による研究書『水上勉の時代』(田畑書店)の刊行や福井県立文学館との連携によるシンポジウム「水上勉の時代」の開催や出版者学会セミナー「生誕百年 没後十五年 水上勉の知られざる世界」への登壇をはじめ、多くの成果発表を行うことが出来た。

2020年度は研究の2年目であったため、前年度に引き続き研究全体の基礎固めとなるような活動を中心に行う計画であった。当初の計画では、長野県東御市の水上勉旧居への調査を4回程度行う計画であった。前年度までに前科研費研究期間の調査分と合わせて約2,000点強の資料のデータ化が完了しているため、その追加調査を行う計画であったが、しかし新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、勤務校でも原則不要不急の出張が制限されたため、本年度は現地調査を諦めざるを得なかった。

その代わりに、水上勉の昭和30年代の仕事、特に「社会派推理小説」を執筆していた時代の資料を調査し直すとともに、これまで不備であったこの時代の単行本及び初出雑誌・コピーを収集し、これらを研究グループで読み合わせるとともに、著作リストの整備を行った。これによって、のちの全集などからも排除されていた時代の水上の仕事の総体が見えるようになった。また、研究代表者は水上が私小説連作『フライパンの歌』(1948年)で文壇に登場し、社会派推理小説『霧と影』(1959年)で二度目のデビューをするまでの文壇的空白期に書かれ、未発表のまま残された小説の草稿の調査を行い、これらについては生成論的なアプローチから、その後の創作とつながる作家の方法の過程を論文「水上勉文学における越境する「私」」などを発表した。

2021年度は研究の3年目であり、本来はここまでの基礎的研究を受けながら発展的研究活動を行ってゆく計画であった。当初の予定では、長野県東御市の水上勉旧居への調査を4回程度行い、前年度までに完成していた約2,000点強の資料データベースの追加調査を行う計画であっ

た。しかし本年度も新型コロナの感染が収まらず、勤務校でも引き続き不要不急の出張が制限されたため、現地調査を諦めざるを得なかった。

そのかわりに、本年度は研究成果の公開に注力することとし、前年度に完成させた水上勉の昭和30年代の仕事、特に「社会派推理小説」を執筆していた時代の著作リストおよびその過程で収集した作品の書籍および雑誌コピーを元にして、2冊の『水上勉社会派短篇小説集』(田畑書店)を研究グループで編み、分担して解説および作品紹介を執筆して刊行した。これにより、水上の中間小説期の作品群とそれ以降の作品群との比較分析が可能となり、今後の研究基盤を整備することができた。また水上の直木賞受賞作「雁の寺」(1961年)以降の私小説的作品と社会派推理小説時代のモチーフの連続性を具体的に証明することが出来たと考える。さらに研究代表者は前記の社会派推理小説の代表作『飢餓海峡』を映画化作品と比較する論文「分身たちの共演 水上勉・内田吐夢・鈴木尚之による映画『飢餓海峡』」を発表した。

2022年度は研究の4年目であり、当初の計画では最終年度にあたり、ここまでの基礎的研究を受けながら発展的研究活動を行ってゆく計画であった。しかし新型コロナの流行により現地での調査が行えない状況が続き、研究計画の大幅な見直しを余儀なくされた。年度末にその状況を受けて研究グループで協議を行い、研究年度を令和5(2023)年度まで1年間延長することを決定し延長申請を行った。

今年度はようやく新型コロナの感染の状況が落ち着き、3年ぶりに長野県東御市の水上勉旧居での現地調査を再開することができた。そこでしばらく停止していた資料整理と調査を中心に据えることとし、また今後の研究の効率化を考えるとまずは大量に存在する資料群を大まかに分類する整理作業を最優先することを選択した。春・夏・秋と三度にわたる現地出張を行い、特に8月に行った調査では複数の大学院生をアルバイトとして雇用し、人手が必要とされる資料の移動や整理を大幅に進めることができた。その結果、水上勉当人の書籍、蔵書、掲載紙誌類の分類整理はほぼ完了し、残りは草稿や書簡類などの分類作業が中心となった。またこちらも3年ぶりに作品の舞台の調査も行うことができ、水上の京都時代の寺社および軍隊関連のゆかりの場所を訪れることができた。さらに研究代表者は「水上勉文学における自己語りの諸相」(田中祐介編『無数のひとりが紡ぐ歴史 日記文化から近現代日本を照射する』収録)を、高橋孝次は「水上勉資料と中堅小説研究の現在」を発表した。

最終年度となった2023年度は前年度に引き続き資料整理と調査を中心に据えることとし、今後の研究の効率化を考えるとまずは大量に存在する資料群を大まかに分類する整理作業を最優先することを選択した。前年同様に春・夏・秋と三度にわたる現地出張を行い、その結果、水上勉当人の書籍、蔵書、掲載紙誌類の分類整理および草稿や書簡類などの分類作業を概ね完了することが出来た。また3月には若州一滴文庫の資料調査を行うとともに、「金閣炎上」の作品舞台である京都および若狭の各地の現地調査も行うことができた。また掛野剛史が昭和文学会にて研究発表「投機としての出版 戦後出版と文潮社」を行った他、論考「ある出版人の行路 文潮社と池澤丈雄」(「青山語文」)を発表した。

この研究期間全体を通して、途中でコロナによる停滞はあったものの、水上勉旧宅に残る資料の分類・整理概ね完了させることができたのは大きな成果である。データベースの登録件数は2200件を越え、これにより今後の水上勉研究の基盤を成立させることがある程度までできたと考える。また、それらの成果を生かして水上勉資料の意義を明らかにする研究成果をいくつも公開することができ、今後の研究に生かしてゆく所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋孝次	4. 巻 夏
2. 論文標題 『金閣炎上』を観劇して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊青年座通信	6. 最初と最後の頁 2-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木志門	4. 巻 251
2. 論文標題 『金閣炎上』の普遍的な強度	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 劇団青年座パンフレット	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 孝次	4. 巻 夏
2. 論文標題 『金閣炎上』を観劇して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊青年座通信	6. 最初と最後の頁 2-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木志門	4. 巻 251
2. 論文標題 『金閣炎上』の普遍的な強度	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 劇団青年座公演パンフレット	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋孝次	4. 巻 107
2. 論文標題 水上勉資料と中間小説研究の現在	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本近代文学	6. 最初と最後の頁 95-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野悠, 小嶋洋輔, 高橋孝次, 西田一豊	4. 巻 27
2. 論文標題 昭和三〇年代の『オール讀物』 中間小説誌総目次(下)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 帝京大学宇都宮キャンパス 研究年報人文編	6. 最初と最後の頁 1-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木志門	4. 巻 -
2. 論文標題 水上勉文学における自己語りの諸相 「私小説」のプロトタイプ的理解の一例として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 田中 祐介編『無数のひとりが紡ぐ歴史 日記文化から近現代日本を照射する』	6. 最初と最後の頁 281-304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木志門	4. 巻 87
2. 論文標題 分身 たちの共演 水上勉・内田吐夢・鈴木尚之による映画『飢餓海峡』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊文科	6. 最初と最後の頁 78-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木志門	4. 巻 97巻5号
2. 論文標題 水上勉文学における越境する「私」－初期自伝小説の草稿を手がかりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國語と國文学	6. 最初と最後の頁 127 - 141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大木志門	4. 巻 22
2. 論文標題 金閣寺が燃えるまで 水上勉『金閣炎上』の生成論的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中央大学政策文化総合研究所年報	6. 最初と最後の頁 125 - 148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野悠, 小嶋洋輔, 高橋孝次, 西田一豊	4. 巻 25
2. 論文標題 【史料紹介】 昭和三〇年代の『オール讀物』 中間小説誌総目次(上)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 帝京大学宇都宮キャンパス 研究年報人文編	6. 最初と最後の頁 1 - 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 4件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 掛野 剛史
2. 発表標題 投機としての出版 戦後出版と文潮社
3. 学会等名 昭和文学会第72回研究集会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 掛野剛史
2. 発表標題 水上勉の浦和時代
3. 学会等名 令和三年度埼玉学園大学公開講座「さいたま学のすその」（オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大木志門
2. 発表標題 三島由紀夫『金閣寺』と水上勉『金閣炎上』 事実と虚構の関係
3. 学会等名 秦野市・東海大学連携講座（市民大学）戦後文学を読む 東京オリンピックの年に考える日本社会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大木志門
2. 発表標題 三島由紀夫「金閣寺」と水上勉「金閣炎上」 事件を加工する方法
3. 学会等名 山梨県立文学館 年間文学講座（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大木志門
2. 発表標題 戦後文学としての水上勉
3. 学会等名 シンポジウム「水上勉の時代」（福井県ふるさと文学館・科研費研究「水上勉資料の調査による戦後文学の総合的研究」共催）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 掛野剛史
2. 発表標題 編集者としての水上勉
3. 学会等名 シンポジウム「水上勉の時代」(福井県ふるさと文学館・科研費研究「水上勉資料の調査による戦後文学の総合的研究」共催)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋孝次
2. 発表標題 シンポジウム「水上勉の時代」(福井県ふるさと文学館・科研費研究「水上勉資料の調査による戦後文学の総合的研究」共催)
3. 学会等名 社会派としての水上勉
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大木志門
2. 発表標題 水上勉文学における自己語りの諸相
3. 学会等名 学際シンポジウム「近代日本を生きた「人々」の日記に向き合い、未来へ継承する」(明治学院大学、研究プロジェクト「近代日本の日記文化と自己表象」主催)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大木志門・掛野剛史・高橋孝次
2. 発表標題 敗戦直後の再出発 文芸編集者としての水上勉
3. 学会等名 第14回日本編集者学会セミナー「生誕百年 没後十五年 水上勉の知られざる世界」(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 大木志門 掛野剛史 高橋孝次 編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 田畑書店	5. 総ページ数 400
3. 書名 水上勉社会派短篇小说集 無縁の花	

1. 著者名 大木志門 掛野剛史 高橋孝次 編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 田畑書店	5. 総ページ数 468
3. 書名 水上勉社会派短篇小说集 不知火海沿岸	

1. 著者名 高橋孝次	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 208
3. 書名 水上勉「般若心経」を読む」解説	

1. 著者名 掛野剛史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 216
3. 書名 水上勉「わが文学 わが作法 文学修行三十年」解説	

1. 著者名 大木 志門、掛野 剛史、高橋 孝次	4. 発行年 2019年
2. 出版社 田畑書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 水上勉の時代	

1. 著者名 大木志門	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 280
3. 書名 水上勉『文壇放浪』解説	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	掛野 剛史 (Kakeno Takeshi) (00453465)	武蔵野大学・文学部・教授 (32680)	
研究分担者	高橋 孝次 (Takahashi koji) (20571623)	帝京平成大学・人文社会学部・准教授 (32511)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------